

2 インフラ不足による発展の阻害

開発途上国においては、生活や経済成長を支えるインフラが著しく不足しており、経済成長の妨げとなり、また生活水準が低く抑えられているなど様々な問題が生じている。

インフラの不足と発展の阻害

全世界で絶対的貧困(1日\$1.08以下)人口は11億人と言われ、1997年時点で約12億人が水へのアクセスを持たず、さらに、サブサハラアフリカ地域では電気にアクセスできる者は人口の約10%に過ぎない(世界銀行)。インフラの未整備は、社会サービスへのアクセスを妨げ、貧困層を拡大し、社会不安の増大なども生み出し、そして人々の生存すら脅かすこととなる。

また多くの途上国・地域では産業振興などに必要なエネルギーや交通などのいわゆる経済インフラは大幅に不足しており、成長による地域や国家としての経済的な自立も困難な状況にある。

膨大なインフラニーズとその対応

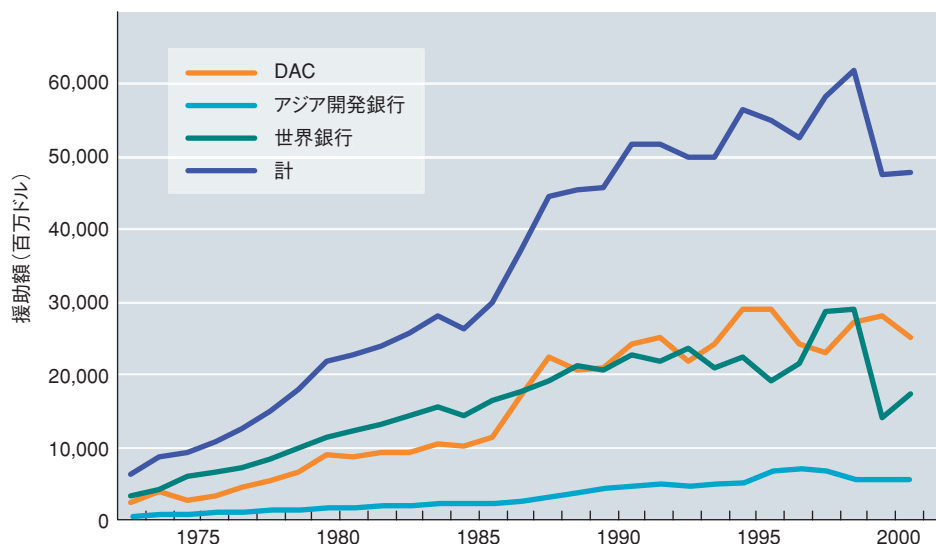
このような問題に対処するためには、インフラの充足が不可欠である。途上国のインフラ水準は、ストックで見ると高所得国平均の10分の1内外しかなく、その整備ニーズは膨大である。

しかし、インフラへの投資が十分に行える国は限られているため、従来から開発援助への期待は大きく、先進国や国際機関も途上国のインフラ整備に積極的な協力を行ってきた。

インフラ投資の減少

DAC諸国の二国間援助と国際機関(世界銀行グループ、アジア開発銀行)による借款の合計額は1970年代初頭からほぼ直線的に増加し1999年には619億ドルに達した。これは同年のチリ、ペルー、パキスタン、フィリピン、マレーシアなどの一国のGNPに匹敵する額であった。しかし、DAC諸国の援助総額とほぼ同じ援助規模を実現してきた世界銀行による貸付額が2000年に一挙に150億ドル減少し、援助総額は474億ドルと10年前のレベルに落ち込み、翌年も同じレベルに留まった。このような援助資金の減少の理由のひとつは、1997年の金融危機に対応するための緊急的な融資が急増したことが挙げられるが、さらに民間投資も大きく減少しており、インフラに対する総投資額は近年落ち込んでいる。

DAC 諸国、世界銀行グループ、アジア開発銀行による援助額の推移



出典：DAC 統計(2003)、他各援助機関の統計資料より作成